

女堤防

ほろろ

いながき がん作
西山三郎 絵



■著者紹介 いながき がん

1928年三重県に生まれる。現在三重県多度町古美小学校教頭。

作品に『イキイキゴンボのうた』『金ごいじいさん』など。『三重のむかし話』再話や『三重の伝説』の編集委員をする。

中部児童文学会に所属。母親読書クラブの指導員として活躍。

* 現住所＝〒511-01

三重県桑名郡多度町北猪飼38-1

■画家紹介 にしやま きょうろう 西山三郎

1930年香川県に生まれる。

油絵から転じ前進座に入座し、舞台美術を手がける。最近は『さんしょう太夫』『まえがみ太郎』『しのだ妻』などを制作。近年は児童文学のさし絵、ポスターデザインなど幅広い分野で活躍。日本舞台テレビ美術家協会会員。

* 現住所＝〒180

武蔵野市吉祥寺南町3-12-2 前進座

913

いながき がん

女人堤防

国土社 1979

120 P 22×19cm (国土社の新作童話9)

基本カード記載例

にょにんていぼう
女人堤防

〈国土社の新作童話9〉

著 者 いながき がん ©1979

1979年11月20日 初版第1刷発行

発行者 長宗泰造

印刷所 厚德社

発行所 国土社

〒112 東京都文京区目白台1丁目17-6

電話 東京943-3721／振替 東京6-90631

落丁・乱丁の本はお取りかえします。 〈検印廃止〉

女人堤防

いながき がん・作

西山三郎・絵



もくじ

1 つばきと村の子どもたち…… 4

2 汲川原くみがわらは地ごく谷…… 9

3 目も口もない地ぞうさん…… 15

4 生まれた子どもが女なら…… 22

5 馬まぐそも黄金こがねの宝たから…… 28

6 ささに花のさく年は…… 33



7	思いもよらぬ大こう水……	41
8	それでも米を出せ……	57
9	女の決心 ^{けっしん} ……	65
10	ふくろうのように何年 ^{なんねん} も……	76
11	水はこえても……	90
12	全員打ち首……	96
13	鈴鹿 ^{すずか} 川原の赤い雪……	105
14	女人堤防 ^{にょにんていぼう} は、今もなお……	118

1

つばきと村の子どもたち

へどん、つばきの花がさく

花がさかいで 実がなろか

一、二、三、四、五、六、七、八、

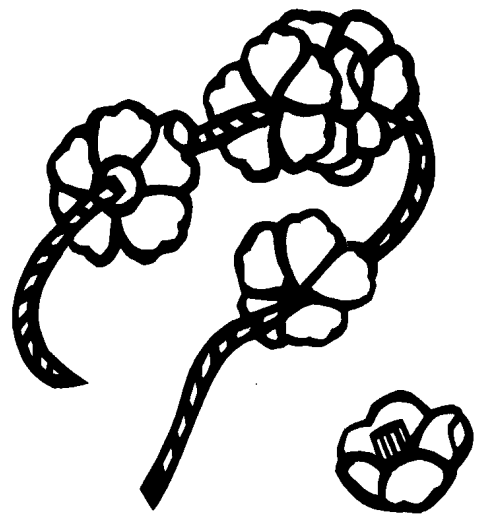
九、十で あずき一しようかししました

子どもたちのお手玉歌が聞こえる。

真福寺の山門わきに、ひとかかえもある、大きなつばきの木があった。

まるくてすべすべした白い幹が、まっすぐに立ち上って、四方にはった枝は、そのはしのほうで重くたれ下がっている。かたい実をいくつもつけているからだ。

つばきの木の下は、子守りの子どもたちの楽しい遊び場である。



春、一面に散りしいた赤い花を、なわに通して、花輪を作り、じゃんけんで負けた者の首にかけて、「ぼうさん、ぼうさん　どこいくの」とはやして、おにをからかって回る。

花のあとの黄色い子房は、子どもたちの知らないうちに大きくなって、寺の墓場のほおずきが色づくころ、お手玉にかっこうの、半分赤い、かたい実になった。

へ一、二、三、四……

お手玉をしている子どもたちのそばを、じょうれんと土ふごを、天びん棒にかけて、キクがとおりかかった。堤下の荒れた田んぼへ、土砂出しにいくところであった。

「キクちゃ、あたいもほしい。あの実取って。」

背中のあかんぼうを、ひっくりかえしそうにした小さな女の子が、キクのそでをひっぱった。

「あーいよ。」

キクは、背^せをいっばいにのばして、ぶらさがっている枝^{えだ}に手をのばしたが、とどかない。

すると、それを見ていた男の子が、

「ええことあるや、ねえちやの肩^{かた}におらが乗ってさあ。」

と、キクのうでを引っぱった。

キクがひざをついてやると、男の子は、すばやくキクの肩^{かた}にまたがった。

「こっち、こっち、もつとこっち。」

男の子は、キクに指^{さし}図^ずしながら、両手をのばして、つばきの実をいくつももいだ。もぎとってはふところに入れた。

ふところからこぼれそうになると、あとの一つを枝^{えだ}ごと口にくわえてとびおりた。そして、その、三つ、四つを、下で待っていた女の子にぎらせた。

それから、口にくわえてきた枝^{えだ}の実をもいで、石にたたきつけた。青い、青いはじけてとんで、中からまだじゆくしていない白い種^{たね}がこぼれた。



「これ、くえるんやにい。」

男の子は白い種^{たね}をひろって口にくわえると、ツウツウと音をたててすった。

女の子たちもお手玉をやめて、男の子を囲^{かこ}んだ。こぼれている白い種^{たね}を手にとると、男の子のまねをして、ツウツウとすった。

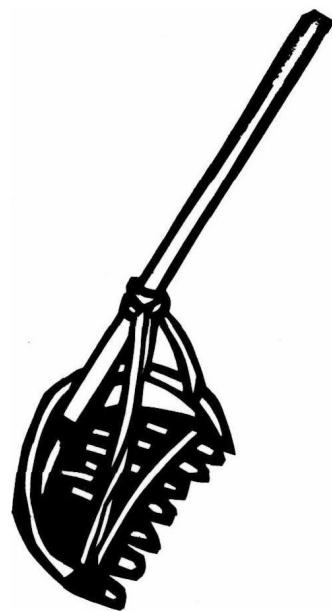
キクも、その一つを口に入れてみた。ちよっぴりしぶいが、あまいし、がとろりととろけて、のどに流れていった。いいかおりがして冷^{つめ}たかった。「青いやつでないにがいに。」

男の子がそういつて、ふところからつかみ出したつばきの実を、女の子たちがうばいあうようにしてひろった。

キクは、天^{てん}びん棒^{ぼう}を肩^{かた}に上げると、荒^あれた田んぼに残^{のこ}っている土砂^{どしゃ}出しに出かけていった。

2

汲川原は地ごく谷



キクが、じょうれんで土砂をかい、土ふごに入れていると、そこへ、同じように土ふごをかついだおタケがやってきた。

女ひとりで働いて苦労しているせいか、ほお骨の立ったやせた顔のすみに、しわが集まっている。

「キクちゃひとるか、えらいのう。」

「うん。おつかあがねてるもんでなあ。」

「それはいかなあ、仕事に疲れきったんやろ。だいじにしてやってや。」

「おおきに。」

おタケは天びん棒をつえにして、土ふごをおろした。

田んぼから荒れ地をへだてて、堤防がつづいているが、こう水で切れたところは大きくくぼんでいる。そのあいだから、みかげ石の砂の川原が光

つて見える。

ここは伊勢の国、神戸領汲川原村――。

鈴鹿山脈のいくつかの谷をけずって流れ出している安楽、井田の二つの川が、鈴鹿川となつて合流するところ、このあたりで、もっとも土地の低いところだ。

ふたりは、土ふごに土砂を入れて、弓のようにしなう天びん棒をきしませながら、田んぼから土手下の荒地に運ぶ。五、六回もすると、肩が病めて痛くなる。あせが目をくもらせる。

おタケがはあはあいいながら、土ふごを投げ出したはずみに、しりもちをついてどつとたおれた。

「おタケさ、だいじょうぶか。」

キクがかけよつて、おタケの肩をかかえあげた。

「だいじょうぶ、だいじょうぶ。」

といいながら、おタケはそのまますりこんだ。

「もう、十何年もつづくじゃ。本多忠舛いう殿さまが、『鈴鹿川左岸の築

堤をするな。した者は打ち首にする』という、ひどい命令を出してからのう。」

「そのことは聞いておったけど、あたいの生まれる前からなんやねえ。」

「そうや、それから、よう堤が切れた。七年前には三か所も切れてのう。このあたりは、みんな土砂の山になってしもうた。そんでに、せめて、もとどおりになおさせてくれと、なんべんも奉行所に願ひ出たんやが、許されん。はらをたてたおらのてい主の伊兵衛と、キクちやのとつつあの嘉兵衛さが、城に出向いて、直接殿さまのところへもうし出たのじゃ。それからは、田んぼにはいった土砂にかぎって、堤にもどしてええということになったが、それとひきかえのように、ふたりはなわをうたれて、つれ去られてしもうた。田んぼはあいも変わらずのさいの川原、なんべん運び出しても、大雨のふるたび土砂がはいって、荒れ地がふえていくばかりじゃ。」

おタケは流れるあせを、着物のすそでこすった。

そのころ、神戸城を囲む右岸の堤防は、たびたび高く積み上げられていた。そのために、水は堤の低い左岸にあふれこんだ。

殿さまは、川の左岸ではただ一つの領地である、汲川原を犠牲にして、いくさのとき、城が水ぜめにあうのを防ごうとしたのかもしれない。しかし、そこに住む人びとにとっては、まったくむごい命令でしかなかった。「どんなに荒れてものう、殿さまにさし出す上納米はへらしてもらえんのだや。」

おタケがはらだたしそうに、天びん棒をあぜに、がとつきさして立った。キクは、ずっしりと重い土ふごを、からだをえびのように曲げて、肩に上げた。

よいの明星（金星）が、明星岳の上にまばたきはじめると、ふたりはやつと家路についた。みちいばをふんで、でこぼこ道を歩いていくと、天びん棒にかけた土ふごが、痛いこしをぺたぺたとたたく。

「なあ、キクちゃ、いらん子やとて嫁こになるな、汲川原は地ごく谷」こんな歌知つとるかや。」

「知らん。」

「知らんほうがええ。おらの生まれた平田野じゃ、そういうてうたいおる。」



そのくせにのう、嫁にもらうなら汲川原^{くみがわら}ともいうわい。身勝手ないいぐさや。そら、だれやて自分の子はかわいいから、仕事のえらいところへはやりとうない。そやとて、よう働く嫁^{よめ}こがほしい。」

「そんなことがつづいたら、汲川原^{くみがわら}に女の人のはのうなってしまうがな。」

「そうさのう。キクちやのように、きようだいのない家の娘^{むすめ}だけになつてしまふわ。」

そういうおタケの背^せに、キクは、

「あたいは、いくら地ごく谷やいうたつて、死ぬまでここで働く氣や。」と、きっぱり答えるのだった。

おタケがふり向いて、足をとめた。

切れたぞうりをぬいで、天びん棒^{てんびんぼう}のさきにひっかけた。

「殿さまは、百姓^{ひやくしやう}には、目も口もいらんいうのかよ。そやけど、切れたぞうりのままで、一生^{いっしやう}終わりたいくないもんじや。」

「あたいだつて。」

それには、キクもふかくうなずいて、目をかがやかせるのだった。

3 目も口もない地ぞうさん



キクの家はもともと、七反（約七〇アール）もの自分の田を持つ本百姓であつたが、父の嘉兵衛がとらわれてから、年ごとに落ちぶれていった。

田んぼは水害で荒れる。土砂出しははかどらない。米が作れなくても、殿さまにさし出す上納米は出さねばならない。米を買うにも金がない。そうなると田んぼを人手にわたして、おさめる米を買うしかない。いつのまにか、地主の田を借りて耕作する小作百姓になつてしまった。

「おつかあ、あたいやて、いつまでか子どもやないに。心配せんと休んでつてえ。」

キクは口ぐせのように、そういった。

病にたおれた母のめんどろをみながら、田畑の仕事をひとりでひきうけて働いている。女だから、ひとりだからと弱音をはきはしない。ひとりだ